市制施行

1943年 昭和18年
太平洋戦争のさ中、岩見沢市は、全国 201 番目、道内 10 番目の市として誕生しました。当時は人口 35,272 人、世帯数 6,281 戸で、戦争特需により石炭の需要が増加する中、石炭を運ぶ鉄道の大操車場があった岩見沢市も成長を続けていました。
　当時、炭鉱でにぎわっていた栗沢村は、この後、昭和 24 年に町制施行しています。

1948年 昭和23年
岩見沢市初の広報紙「岩見沢市報」を発刊開始。昭和 20 年の敗戦から立ち直り始めるこの時代、戦後の様子や現在の日本の基盤が形成されていく様子が見られます。現在ご覧いただいている「広報いわみざわ」の前身は、昭和 26 年発刊の「市のあゆみ」です。

1949年 昭和24年
国立大学設置法の施行により、現在の北海道教育大学岩見沢校の前身である、北海道学芸大学札幌分校岩見沢分教場が設置されます。

1951年 昭和26年
北海道開発庁の地方支分部局として北海道開発局が開庁。北海道の開発が加速していく中、待望であった桂沢ダムの工事が着工。昭和 30 年に桂沢水道企業団が設置され、昭和 32 年にダムが完成。現在も、洪水防止や水の安定供給のほかクリーンな発電に寄与しています。

1952年 昭和27年
GHQ が解散し、日本は独立国家として主権を回復しました。岩見沢市では、講和記念の北海道平和博覧会が開催され、来場者は戦後益々の復興へ思いを馳せながら、数々の珍しい展示を楽しんでいました。

1953年 昭和28年
日本でも地上波テレビの放送が開始したこの年、保安隊が岩見沢に駐留を開始しました。当時は、平常時の除雪作業を行うなど、市民生活に密接に関わっていた保安隊。陸上自衛隊の駐屯地となった現在も、災害などの有事には大変頼もしい存在です。
　また、この年は幾春別川に狩野橋が架かりました。それまでは渡し場から南北を行き来していたため、大変便利になりました。

1954年 昭和29年
天皇皇后両陛下が、開発が進む道内各地を巡幸啓され、栗沢町と岩見沢市にも行幸啓になり、たくさんの市民がお迎えしました。

1956年 昭和31年
この年、樺太犬のタロとジロが観測隊とともに南極大陸へ向かいました。この頃岩見沢市は、財政状況が悪化を続け、ついには財政破たんにより再建団体に。８か年の自主再建計画をたて、経済の成長もあり、昭和 39 年に再建は完了しました。
　このとき、２年続けての水害に苦しんでいた北村でも、財政破たんにより再建が始まりました。

1958年 昭和33年
上幌向を皮切りに、昭和 34 年に春日町、昭和 35 年に鳩が丘、昭和 39 年に東、昭和 43 年に大和と、大規模な土地区画整理事業が相次いで実施され、市街地が拡大していきました。

1962年 昭和37年
高度経済成長期の好景気が続く中、東京都の人口が世界で初めての 1,000 万人を突破した頃、岩見沢市の人口も大きく伸びていました。これを受け、全市的に従来の開拓時代から使われていた字名地番から、わかりやすく整理された字名地番に改正しました。宮の下や利根別など、現在でも市内各所で、町会名や公園などに旧字名の名残があります。
　この頃から、外国産の安い石炭の輸入増加や石油へのエネルギー転換が進み、高度経済成長で日本中が活気づく中、栗沢町の炭鉱の繁栄には陰りが見え始め、人口は減少の一途をたどっていきます。

東北以北最大だった岩見沢操車場

1964年 昭和39年
東京オリンピックの開催年で、世間が大いに沸いていた中、岩見沢市には駒澤大学北海道教養部と、付属岩見沢高等学校が開校しました。翌年、駒澤短期大学も開校し、駒園・緑が丘地域周辺は文教地区として学生寮やアパート、食堂などが増え、市街地にも若者が溢れるようになりました。

万字炭鉱周辺では、映画館や児童遊園地などの娯楽施設もあり、炭鉱町として栄えていた

1965年 昭和40年
市役所の庁舎が、現在地に移転新築されました。栗沢町役場は昭和 42 年に、北村役場は平成 16 年に、庁舎が建て替えられ、それぞれ現在の本庁舎・支所となっています。
　また、市内中心部の商店街で大火災があり、91 店舗、125 世帯 362 名の方々が罹災。11 月末の冬にさしかかる頃で、住む家を失った市民は仮設住宅での日々を余儀なくされました。

1968年 昭和43年
国鉄函館線の小樽－滝川間が電化され、昭和 50 年には蒸気機関車が役目を終えています。この頃、日本は世界第２位の経済大国となり、先進国入りを果たしています。
　岩見沢市では、市民憲章や市旗、市の木“こぶし”・花“バラ”・鳥“ハト”が制定されるなど、市民参画のまちづくりが活発になっていきます。昭和 47 年には栗沢町民憲章が制定されました。

明治 41 年から活躍した一の沢水源池。桂沢ダムの完成までは市民の貴重な水源だった

1973年 昭和48年
前年には札幌オリンピックがあり、日本中が日の丸飛行隊に沸いた余韻が残る中、日本経済はオイルショックにより混乱します。
　この年は、市制施行 30 周年の年で、記念事業として市役所本庁正面玄関に、100 年後の市民へ向けてのタイムカプセルが設置されました。収納された 156 件、303 点の品物は、今から 60 年後の西暦 2073 年、皆さんの前にお目見えすることでしょう。

天皇皇后両陛下の奉迎には、市内外から多くの人が押し寄せた

1974年 昭和49年
国道 12 号線で、待望の岩見沢バイパスが全面開通しました。これにより、旧国道（現在の４条通）による市内中心部の慢性的な交通渋滞が緩和され、岩見沢市は一層、交通の要衝としてにぎわっていきます。
　また、今年４月にオープンする生涯学習センターに移転となる、空知婦人会館・勤労青少年ホームが、この年にオープンしています。

　５月号では、この後、栗沢町の万字炭鉱閉鎖や昭和 56 年の大水害といった困難を乗り越えながらも、市内中心部で相次ぐ大型店舗の開業など、バブル景気とともに現在の岩見沢市が形づくられていく様子を皆さんに紹介します。
問合先　市秘書課広報係